◆地域活動

タカセガイ中間育成・放流指導

大城信弘・安井里奈・紫波俊介

1．目的・背景

八重山地区では２地区で計１１２基のタカセガイ中間育成礁が設置され、放流も行われているが、最近は十分には管理が行き届いて無い状況に有る。

其処で、昨年度に引き続きタカセガイ中間育成の調整、実態把握を行い、タカセガイ礁の有効活用策を探った。

２．方法

石垣市水産課と連携し、市の行う種苗受け入れ、取り上げ、放流を調整すると共に、現場作業時に現況を把握した。また、礁利用の可能性を探る為、クモガイ、マガキガイ種苗の礁への放養を試みた。

３．経過及び結果

（１）取り上げ放流作業

取り上げは主に青年部が行い、一時室内槽に収容し、随時各地へ放流されたが、離島漁村再生支援交付金事業を用い行われた。

取り上げ作業は干潮時に行い、グレーチングを起こして採取し、半分は育成礁の掃除も行った。貝は網袋に収容し、種苗施設に持ち帰り、計測、計量を行った。

今年度の取り上げ数は、真栄里地区が１８年１１月１８日、１９日の取り上げで、平均拡幅２０．８㎜の１２,５００個、石垣地区が１９年２月２０日、２１日の取り上げで、平均拡幅３３．２㎜の２３,７００個であった。

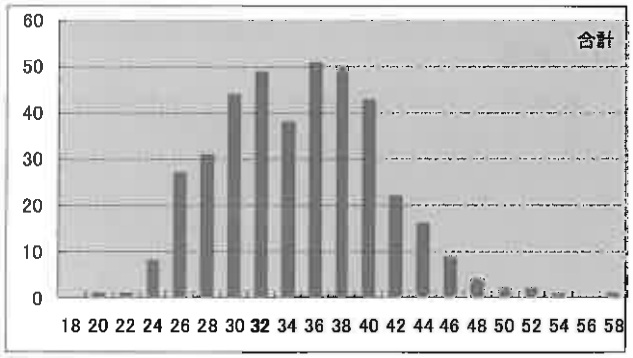
種苗は真栄里地区が平成１７年１１月７日、平均拡幅７.４ミリの３０９千個、石垣地区が平均拡幅７.１ミリで２８３千個の受け入れである。

（２）種苗受け入れ

種苗は全て、栽培センター生産のもので、真栄里地区は、１８年１２月６日、平均殻幅８．５ ㎜の２００千個を、石垣地区は１９年３月７日に平均拡幅８．２ｍｍで２００千個収容した。今回の種苗は殻が黒ずみ、死亡している固体も混じり、一部取り分けた事例では、2/3が死亡していたとの事であった。

取り上げ作業

計量再放流



石垣地区殻幅組成

（３）クモガイ、マガキガイ種苗放養

種苗は１８年４月９日採卵のマガキガイと６月１１日採卵のクモガイを、石垣市種苗施設で種苗生産したものである。

１８年８月１７日に、生残したマガキガイ９０個とクモガイ１,０００固体に、殻頂部に赤のアロンアルファーで標識した。

その後、水槽にマクリを入れて飼育を続け、クモガイは殻表面に海藻を付着させ、９月２０日に、生残したマガキガイ殻長３０㎜の７９個を真栄里のタカセ礁一枡に、クモガイは平均殻長３２㎜を４１８個を３枡に収容し、３５０個は周辺の藻場に放流した。

放流クモガイ

１１月１９日の取り上げ時にはマガキガイは生残が無く、クモガイは２９個の生残で、平均殻長４１．６㎜であった。死殻はマガキガイが１０個、クモガイが１４個回収され、周辺からは天然もののマガキガイ１個が採集された。

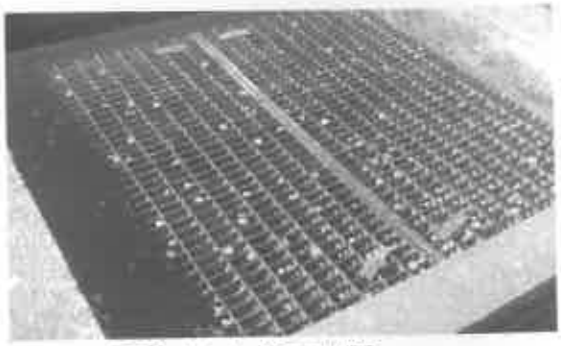
４．考察

真栄里、石垣の両地区とも、全数採取では無い為、生残率（残存率）を確定するのは困難であるが、真栄里地区が約４％、石垣地区が８．３％であった。

真栄里地区は１４枡にグレーチングが無く、育成礁の用を成してない。さらに種苗収容数が多く、前年度の取り上げが表面からで、礁の掃除は殆ど行われて無い事が低生残率の要因であろう。石垣地区でも生残率は昨年度の半分に低下しており、礁の掃除不足が要因と考えられる。

今回も１６名で、一地区２日掛りの作業であったが、礁の半分の掃除がやっとであった。礁掃除の効率化を計る為、真栄里地区では、礁の上にグレーチングを積み重ねて干出処理を試みたが、結束ロープが細く一日で切れて中断した。

グレーチングの掃除はかなり手間を要し、今後とも、現場での効率的な処理法の開発が必要である。現状のままでは、掃除のできる半分づつを、隔年での取り上げも試みる必要があろう。



掃除された枡の状況

掃除されて無い枡の状況

今年度も、礁の雑藻対策、多角的利用の検討の一つとして、マガキガイ、クモガイ種苗の収容を試みた。収容２ヶ月後の生残はマガキガイが０％、クモガイが約７％で、殻長も１ｃｍ伸びていた。

両種とも死殻や割れた殻も回収されたが、回収されたのは５％弱で、数の減少が死亡によるのか、逸散によるのか不明である。ただし、礁外の潜水調査では、クモガイは回収されず、見落としもあろうが、若干は礁の保護効果があったものと考えられる。

次年度からの、放流種苗の有償化が確定し育成礁の遊休化が懸念される。今後ともより効率的な管理や、複合的利用の検討が必要とされる。

５．今後の課題

放流を今後も永続的に続ける為には、依り簡便な、効率の良い管理手法の開発が急務である。

又、礁の管理から、直接的に個人の利益を生む養殖的利用を解禁し、公共的な放流との複合化を計り、漁民自らの主体的な管理が行える態勢を整える事が必要である。